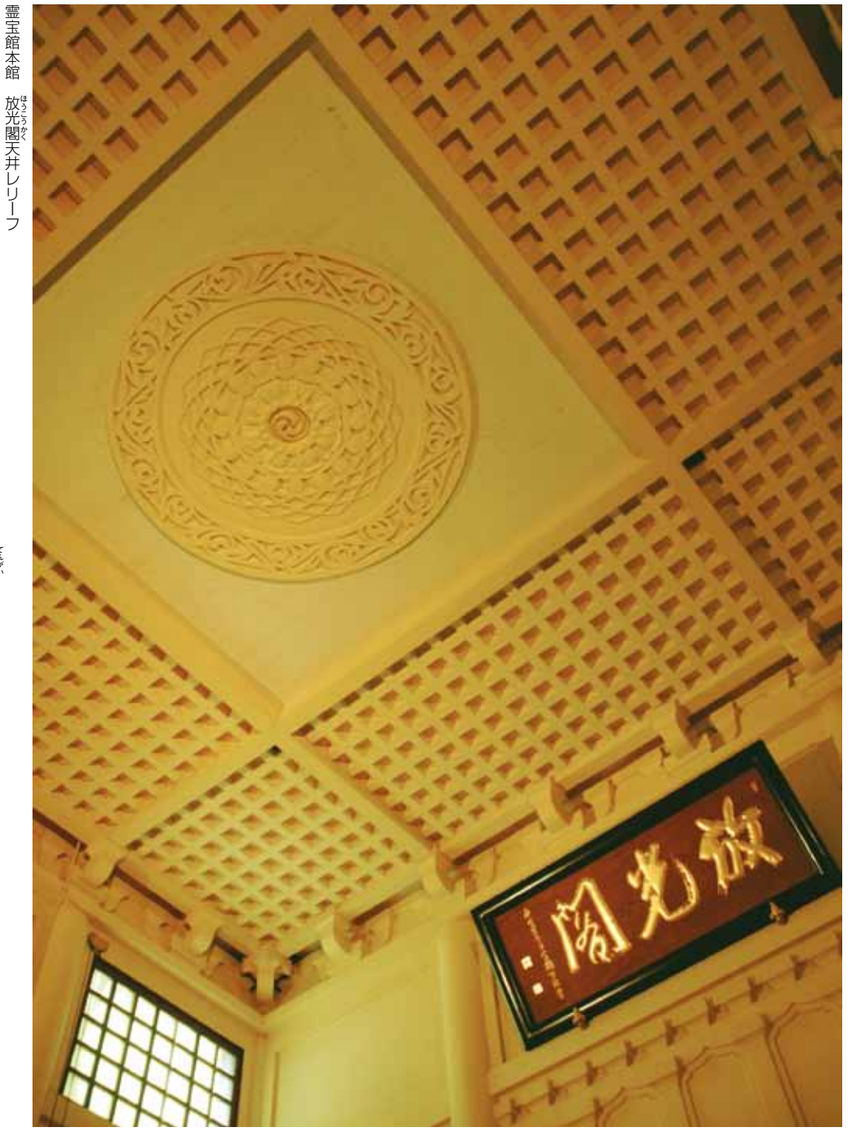
霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第133号
令和2年2月4日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp



霊宝館本館　放光閣（ほうこうかく）天井レリーフ
本館は大正十年（一九二一）の開館当初からある建物です。仏像の上部にかざす天蓋（てんがい）がモチーフで、仏が放つ光を反射するかのようです。

利用案内

開館時間
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分
■休館日　年末年始のみ（展示替時 臨時休館あり）

■拝観料　大人 600円　高・大学生 350円　小・中学生 250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり

第133号　目次

平常展のご案内……2～3
収蔵品の紹介105……4
高野山霊宝館からのお知らせ……5
特集 ミュージアム法話 ……6～7
高野山の考古学（二十三）……8～9
古絵図で巡る高野山探訪（その十一）……10～11
高野山の生き物　第二回……12

令和元年度平常展
「密教の美術」
開催中
令和２年４月12日（日）まで

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！　ホームページ割引券もご利用ください

高野山の生き物　第二回

早春の縁起草（フクジュソウ）

高野山寺領森林組合　西田　安則

今では幻となった、高野山に自生していたフクジュソウ

春先に花を咲かせ夏までには葉が無くなってしまう植物をスプリングエフェメラルと呼びます。直訳すると「春のはかないもの」という意味だそうです。また、春の妖精とも呼ばれています。フクジュソウの他にもトウゴクサバノオ、イチリンソウなどがスプリングエフェメラルとして高野山の林床を彩ります。またスプリングエフェメラルは植物だけでなくギフチョウなどの蝶も含まれます。

フクジュソウと言えば頭に浮かぶのが、お正月の盆栽の寄せ植えでは無いでしょうか?。名前の由来は旧暦の正月に花を咲かせるので床の間に飾られ、おめでたいということから江戸時代初期の頃から福寿という名前がつけられたと言われています。

もう三十年以上前ですが、高野山にも野生のフクジュソウが自生していたと聞き、かつて自生していた山中を探し廻ったことがありました。数年後ようやく岩の間から咲いているフクジュソウを見つけた時は涙が出るほど感激しました。その後周辺部を探すと二十五株ほど見つけることができました。年々少しずつですが、個体数を増やしていっていたのですが、ある年の豪雨や盗掘によりその谷からは消えてしまいました。

日本でのフクジュソウは、フクジュソウ、キタミフクジュソウ、ミチノクフクジュソウ、シコクフクジュソウの四種類に分けられています。これら四種類の分布域は、キタミフクジュソウは北海道東部、ミチノクフクジュソウは本州、九州、シコクフクジュソウは近畿、四国、九州、フクジュソウは北海道から九州に分布しています。ちなみにフクジュソウの染色体は四倍体で他は二倍体だそうです。（二倍体に比べると四倍体の方が花が大きくなるようです。）

さて、高野山でみられるフクジュソウの種類は?。今となっては調べることは叶わぬ夢となってしまいました。

因みに南海電鉄の極楽橋駅から高野山駅間で二月の下旬から三月中旬まで花を咲かせているフクジュソウは植栽されたものです。

令和元年度 冬期平常展

「密教の美術」

令和2年1月18日(土)～4月12日(日)

前期　1月18日(土)～3月1日(日)
後期　3月3日(火)～4月12日(日)

会期中無休

お大師様が開かれた高野山は神仏習合の風習もあり多くの神様がお祀りされています。その代表とされるのが伽藍にある御社です。そこには高野山の地主神で、開創にも関わったとされる、丹生・高野明神をはじめとする四社明神、三十日を日替わりで守るとされる三十番神がお祀りされています。また、お大師様が開かれた真言宗でも、インドの神々を天部の仏様として取り入れられています。今回の展覧会では高野山並びに、高野山真言宗に取り入れられ、お祀りされている神々を中心に展示します。

主な展示品

■絵画

重　文	弁才天図	宝城院〔前期〕
重　文	毘沙門天像	光台院〔後期〕
未指定	吉祥天像	霊宝館〔前期〕
未指定	摩利支天像	宝寿院〔後期〕
未指定	荼吉尼天像	親王院
未指定	仏涅槃図（模写）	金剛峯寺
未指定	十二天像	金剛峯寺
未指定	三十番神像	親王院

■彫刻

未指定	紫檀厨子入ラーダー&クリシュナ像	金剛峯寺
未指定	仏頂尊勝母坐像	金剛峯寺
未指定	ツォンカパ坐像	金剛峯寺
未指定	大黒天立像	金剛峯寺

■書跡

国　宝	金銀字一切経（中尊寺経）	金剛峯寺
国　宝	紫紙金字金光明最勝王経	竜光院
重　文	法華一品経	金剛峯寺〔後期〕

■工芸

未指定	チベット語観音呪碑文	金剛峯寺

■歴史資料

重　文	高野版板木（勧学院・奥之院）	金剛峯寺

三十番神像　室町時代　親王院
1ヵ月(30日)を日替わりで守護するとされる。
伽藍御社に祠がありお祀りされている。

荼吉尼天像　江戸時代　親王院

吉祥天像　大正時代　霊宝館〔前期〕

令和2年 2月 4日 霊宝館だより 第133号

重文　法華一品経　平安時代　金剛峯寺〔後期〕

仏頂尊勝母坐像　近代　金剛峯寺
チベットで長寿三尊のひとつに数えられ、罪障消滅、延命長寿の陀羅尼を仏格化した女神である。

紫檀厨子入ラーダー＆クリシュナ像　インド パーラ期　金剛峯寺
インド神話に出てくるラクシュミーとヴィシュヌの別の姿である。
仏教ではラーダは吉祥天、クリシュナは那羅延天として取り入れられている。

◎文化財の保存上、展示品が変更される場合があります。
◎期間中、一部展示替を行います。

次回予告

令和2年度春期企画展
「ほとけさまと動物たち」
令和2年4月18日(土)～7月5日(日)

国宝　仏涅槃図（平安時代、金剛峯寺）
ゴールデンウィーク期間限定公開予定です。

収蔵品の紹介 105

摩利支天像（まりしてんぞう） 一幅

絹本著色　江戸時代後期（十八～十九世紀）
宝寿院蔵　縦九九・五cm　横四二・三cm

壇上伽藍（だんじょうがらん）にひっそりと祀（まつ）られるほとけ

（部分）

重文 十巻抄（鎌倉時代、円通寺蔵）
「摩利支天菩薩」項より

壇上寺家絵図　宝永３年（1706）
金剛峯寺蔵　より　伽藍御社部分
総社（白丸内）には「摩利支天」とあります。

摩利支は梵語で「太陽・月の光線」を意味し、陽炎（かげろう）を神格化したのが摩利支天です。常に太陽の前を行き、（日光に隠れて）人に見られず知られず捉えられず害されないとされ、そのため中世以降は戦場での安全や勝利を願う武士の間で信仰が盛んになりました。その姿は、元は二臂（ひ）（腕が二本）で姿を隠すための天扇（てんせん）を持つ女性神とされましたが、のちに三面三眼に六臂または八臂で、猪に乗る男性像であらわされるようになりました。また造像の際は、金属や白檀（びゃくだん）を用いて一～二寸（三～六cm）程の小像とするよう諸経典に記されています。

本像は合掌した手に天扇を持って立つ、中国風の衣装の男性神として描かれた珍しい姿です。伝来など詳細は不明で、軸裏に「摩利支天／信龍」と墨書があるのみです。高野山では摩利支天の遺例は少なく、当館には図像集を除くと本像のほか、近世の絵画や小像がわずかに伝わるのみですが、伽藍御社（みやしろ）（重文）のうちの総社（そうしゃ）（三の宮）で摩利支天が祀られています。江戸時代後期の『紀伊続風土記（きいしょくふどき）』や『紀伊国名所図会（きいのくにめいしょずえ）』によると、総社には高野山の土地を守護する神々である十二王子（じゅうにおうじ）と百二十番神（ばんじん）（伴神）、そして摩利支天を祀る、とあります。現在の総社は大永二年（一五二二）に建てられたもので、正面に三つの扉があるのはそれぞれをお祀りしているからでしょう。江戸時代前期～中期頃の絵図には総社のところに「摩利支天」と記されたものがあり、かつては知られていたのでしょうが、現在はほとんど知られていません。

余談ですが、武田信玄の軍師として知られる山本勘助（やまもとかんすけ）は二十五歳の時、諸国を行脚（あんぎゃ）して高野山に登り、十七昼夜の間、武芸の上達を祈ったところ夢枕に弘法大師が立ち、摩利支天の像を授けられたといわれています。愛知県豊川市の長谷寺（ちょうこくじ）には、この話と共に勘助が身につけていたという一寸三分（約四cm）の木造摩利支天騎像（豊川市指定文化財）が伝わっています。二〇〇七年の大河ドラマ「風林火山」でこのエピソードが放送され、問い合わせもありましたが、当時の霊宝館でそれを知る人は皆無だったため、陽炎のように捉えがたい話に思った記憶があります。

（福形安希子）

高野山霊宝館からのお知らせ

◎LED照明交換工事完了

平成29年から行っていた展示照明器具の取り替え工事が、このほど完了しました。LED光源は省エネ性能、高い発光効率、長寿命に加えて文化財にとっては有害ともなる紫外線を出さないことなどが知られています。LED化に伴って、文化財の保護という重要な事柄と同時に、展示物の効果的な演出も可能になりました。

12月下旬に新館３室と本館紫雲殿の工事が終わりました。

◎秋期企画展イベント報告

秋期企画展「祈りのかたち―密教法具の世界―」に関連し、10月26日㈯と11月9日㈯にミュージアムトークと密教体験「法具に触れる」を開催いたしました。参加者の皆様は展示中の名品を鑑賞したのち、現在高野山で使用されている、さまざまな密教法具に触れ、また音を鳴らして、実物の重みや音の響きに興味津々の様子でした。博物館やお寺で遠目にしか見ることのない法具に触れることで、お坊さんが行う密教修法がどのようなものなのか、その一端を感じていただけたと思います。

学芸員が用途や持ち方を簡単に説明したのち、実際に触れていただきました。

◎ミュージアムショップ 新商品です！

カラフルな水引（みずひき）細工の朱印帳バンドや、高野紙（こうやがみ）を使ったしおりの販売を始めました。高野紙は高野山周辺で作られている手漉（すき）き和紙で、弘法大師空海が製法を伝えたといわれますが、作り手の減少で現在では貴重なものです。昨年4月に発見された八万四千宝塔（はちまんしせんほうとう）をかたどった高野紙しおり（1、500円）は霊宝館限定商品です。

水引で作った玉の中にはお香が込められています。

塗香（ずこう）カード（500円）は特殊な製法で、カードを軽くたたくと表面に少量の塗香（粉末のお香）が浮き出し、身をお清めすることができます。お寺へお参りする時に、写経の時に、またリラックスしたい時にもお使い下さい。

カードのデザインは霊宝館本館の天井レリーフ（表紙参照）です。

◎友の会会員募集

- 会員証提示で会員本人のほか同伴者3名様まで霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
- 年4回発行の機関誌「霊宝館だより」送付

〈年会費〉
一般会員（個人）　3、000円
一般会員（法人）　30、000円
皆様のご入会をお待ちしております。

高野山霊宝館は令和3年（2021）5月、開館100周年を迎えます。

お問い合せ先　高野山霊宝館　TEL 0736―56―2029㈹

特集 ミュージアム法話
「いつもとは一味違った文化財鑑賞を」

すでにご存じの方もおられると思いますが、平成二十八年度から始まったミュージアム法話について、改めてご紹介させていただきます。そもそもミュージアム法話は、霊宝館に展示されている文化財を見ながらお坊さんに法話をしていただくという企画になっています。ここ霊宝館では仏様のお性根（魂）が入魂された状態で展示しています。つまり展示と同時に「信仰の対象」、「お寺の御本尊」の状態でおまつりされています。こういった仏様の前で法話を聞き、仏様の意味や教えに触れるというものです。法話をしてくださるのは、高野山で布教の勉強をし、本山布教師・本山布教師心得の資格をとられた先生です。高野山内では、金剛峯寺新別殿、奥之院茶処などでも法話を聞くことができます。

令和元年度ミュージアム法話実施報告

五月十一日	岩瀬　密雄　師（阿波　普光寺）	
六月　八日	恵美　香優　師（徳島　徳藏寺）	
七月　六日	岩田　賢栄　師（島根　朝日寺）	
七月二十日	森田　泰澄　師（愛知　喬正院）	
八月　三日	中原　慈良　師（補陀洛院徒弟）	
八月十七日	富田　向真　師（高野山高校教諭）	
九月十四日	上田　希真　師（丹波　観音寺）	
十月十九日	西　悠円　師（福岡　遍照院）	

ミュージアム法話
～お坊さんと霊宝館巡り～

霊宝館で展示されている仏さまは「文化財」ですが、それぞれの仏さまにはお性根（魂）が入魂された「信仰の対象」でもあります。

お坊さんの法話を聴きながら、仏像や仏画などをご覧になりませんか？

いつもとは一味違った文化財鑑賞とご参拝ができますので、是非お越しください。

（左）霊宝館の入り口に集合し、時間になると、布教師から説明があり、両手に身と心を清める塗香を塗ってからミュージアム法話が始まります。

（右）結縁大師像の前で法話を聞き、皆様にはお大師様の右膝に触れていただきご縁を結んでいただきます。

（下）結縁大師像

最後の放光閣でまとめの布教を聞き、お勤めをして終了となります。

展覧会の内容により、お話をする文化財が変わります。
写真は令和元年度大宝蔵展にて

当館の主な法話内容として、新館前室での結縁大師像前の法話があります。霊宝館に来られたことがある方はよくご存じだとは思いますが、こちらの結縁大師像は陶製で唯一触れることができる文化財です。どこでも触れられるわけではなく、右膝のみ触れることができます。では、なぜ右膝のみかと言いますと、昔の僧侶が同じ体験をしたからです。（下記「御衣替え」参照）この僧侶と同じ体験を皆様にしていただくと共に、その他の文化財を見ながら「仏像について」「お大師様の教え」等をお聞きしていただけます。また、当館では年四回展示替えを行っています。その都度展示品が変わりますので毎回違った法話をお聞きいただけます。お時間のご都合がつく方は、ミュージアム法話に是非ご参加いただき、いつもとは違った視点から当館を楽しんでいただけたらと思います。

【参加費】　通常の拝観料に含まれます。
【参加方法】　拝観受付を済ませ、霊宝館玄関前に集合してください。
【開催時間】　午後一時より　約四十五分間（予定）
【開催日】　令和二年度は未定
霊宝館だより等でお知らせします。

「御衣替え」

お大師様が入定されてから八十六年後のことです。当時の時の帝、醍醐天皇の夢枕にお大師様がお立ちになり、一句の詩を詠まれて消えて行かれました。その時のお姿は、ぼろぼろの衣をまとい、髭や髪が伸びきったお姿でした。そこで、新しく檜皮色の衣を贈ると共に「弘法大師」の諡号を送ることになりました。東寺の長者である観賢僧正とその弟子淳祐は、天皇の命を受け、高野山に登り、奥之院に向かいました。御廟の扉を開けると、そこにはお大師様のお姿はなく、一面に霧が立ちこめていました。観賢僧正は、修行が足りなかったのだと思い、そこで礼拝を行います。すると立ちこめていた霧がすこしずつ晴れ、お大師様のお姿を拝見することが出来ました。その時のお姿は、天皇の夢枕に現れたのと同じ、ぼろぼろの衣をまとい、髪や髭の伸びきったお姿でした。観賢僧正は、伸びた髪や髭を綺麗に剃り、新しい檜皮色の衣に替え、「弘法大師」の諡号をお伝えしました。その時横を見ると、弟子の淳祐が泣いていました。理由を聞くと修行が足りずにお大師様のお姿を観ることが出来ないと…。

そこで観賢僧正は、淳祐の右手をとり、お大師様の左膝へと運びました。すると淳祐は、「姿は見えませんがお大師様の温かさを感じることが出来ました」と、涙を流して喜ばれました。

お大師様の伸びきった髪や髭を綺麗に剃る観賢僧正

お姿が見えず泣いている淳祐の手を、観賢僧正がお大師様の膝に運ばれる

出典　重文　高野大師行状図画　地蔵院蔵　より

高野山の考古学（二十三）

石塔の銘文を読む⑤

公益財団法人 元興寺文化財研究所
狭川 真一

金剛三昧院客殿及び台所の礎石には、六個の石造物が転用されていました。いずれも五輪塔の部材で、一石五輪塔も含まれています。石塔の部材を礎石に転用するという感覚は、現代人には少々理解し難い面もありますが、戦国時代の城の石垣に石塔を転用する事例は各地で知られており、都市の道路側溝や寺院の基壇に転用されている事例もあります。中世末期では決して珍しい行為ではなかったようです。

今回はそのことを取り上げるのではなく、転用されていた五輪塔に記載された銘文の一つをご紹介しようと思います。すでに結城啓司さんが詳しく解説されていますが、高野山奥之院の中世を考えるうえで重要な銘文ですので、ここに紹介する意味はあると考えました。以下、結城さんの報告文を参考にしながらその資料をご紹介します。

転用された五輪塔の地輪とその銘文

今回紹介しようとする部材は五輪塔の地輪で、事務所東室中央柱の礎石として転用されていたものです（写真1）。硬質の砂岩製で、大きさは幅三五．〇センチ、高さ二六．二センチで上面は緩やかな勾配を作って雨水が外側へ流れ落ちるよう工夫されています。上面の中央には直径六．〇センチ、深さ一．七センチの円形をした枘穴があり、水輪底部の枘を受けていたことが分かります。また底部は凹凸が良く残っているので、直接地面に安置する設計だったと思われます。

この地輪の高さから想定される五輪塔全体の高さは、およそ一メートルと推定できます。部材の組合せ方は異なりますが、現在西南院の境内に並ぶ一三世紀後期の五輪塔群とほぼ同じ規模の塔だったと予想され、当時の高野山では大きな石塔の一群に属していると理解できます。

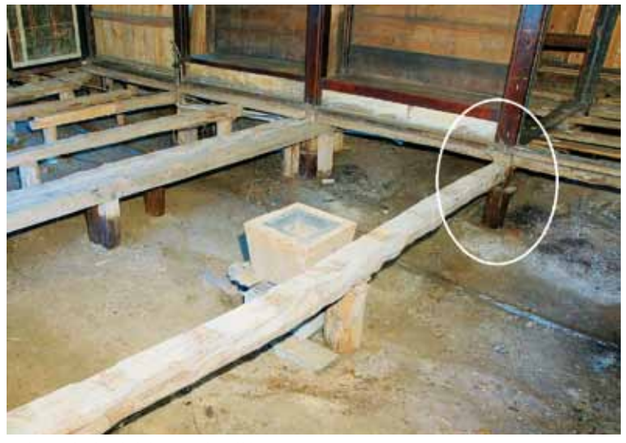


写真1　金剛三昧院客殿での転用状況
（○印柱の礎石に転用／和歌山県文化財センター提供）

さて銘文ですが、地輪側面の一面に大きく梵字「アー」を配し、その反対面に銘文を刻んでいます（写真2・拓本）。

為待三會之暁
卜居於高野山
造立供養斯
元亨改元辛酉
三月廿一日沙弥契明

とあります。まず、この銘文に見える主要な用語を解説してみましょう。

三會の暁＝お釈迦様が入滅されてから五十六億七千万年後に弥勒如来がこの世に出現されて、三度の説法を行うことを言います。ここでは、その時を待つため、と記載されています。

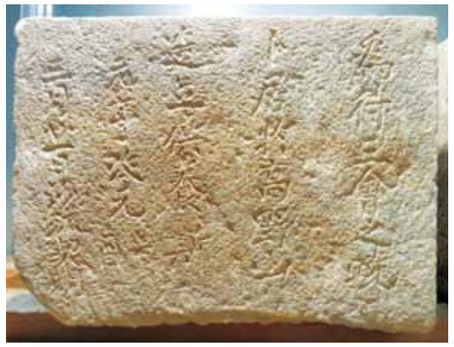
卜居於高野山＝卜居とは土地の良し悪しを占って住居を定めることを言いますので、高野山を居所に選び定めたと理解できます。これは自身の最終的な生活の場だけでなく、埋葬の場所も含めた文言だと思われます。

造立供養斯＝この五輪塔を造立した、ということです。

元亨改元＝元号を元亨に改元した年という意味ですので、元亨元年のこと。西暦に換算すると一三二一年となります。

三月廿一日＝五輪塔を造立した日付ですが、弘法大師がご入定なされた日付に一致させていますので、この塔の造立背景に弘法大師への信仰も重なっていることがわかります。

沙弥契明＝この石塔を建てた人です。在俗で出家した男性であることは分かりますが、具体的に追跡することは困難です。この石塔を最初に調査された結城さんは、五輪塔の規模から考えて一定の地位や財力を有した人物と推定されています。



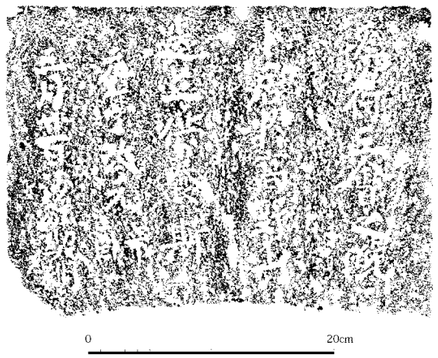


写真2　五輪塔地輪写真および拓本

契明はなぜ銘文を彫ったのか

これまでいくつか紹介してきたように、高野山の石塔には銘文を記載したものがいくつも残っており、それぞれに興味深い歴史的事実を教えてくれることはご理解いただけたかと思います。その中で今回あえてこの塔をご紹介したのは、高野山というところが弘法大師信仰と弥勒信仰が一体化した聖地であると、具体的に記載している数少ない銘文だからです。実はこのような銘文は、滅多にお目に掛かれません。高野山ではこうした信仰形態があまりに当たり前のことであり、通常は記載せずともその意味が込められていると理解していたのでしょう。しかし沙弥契明にとっては、三會の暁に遭遇できることを信じ、遠方からこの聖地に移り住んだことそれ自体が、極めて重要なことだったのだと思われます。契明の高野山に対する強い想いが伝わってくる銘文です。

今回でひとまず石塔の銘文を読むシリーズを終え、次回からは土地を鎮める地鎮・鎮壇の遺構や遺物についてご紹介してゆきたいと考えています。

【参考文献】
結城啓司二〇一一「礎石に転用されていた五輪塔について―金剛三昧院客殿及び台所について―」『財団法人和歌山県文化財センター年報2010』公益財団法人和歌山県文化財センター

「古絵図で巡る高野山探訪」（その十二）

火災①

図1 『高野山壇上并寺中絵図』（元禄6年〈1693〉金剛峯寺蔵）

高野山の子院

高野山千二百年の歴史は、火災との闘いの歴史とも言えます。高野山は標高八〇〇メートルの山上にあり、年間降水量も多く、過去には落雷による火災が度々発生し、寺院や町家などが焼失と再建を繰り返しました。現在高野山には、金剛峯寺以外に一一七ヶ寺の子院（塔頭）がありますが、『御公儀上一山図』（正保三年〈一六四六〉金剛峯寺蔵）に付属する『高野山絵図之帳』によると、かつては千八百六十五ヶ寺もの子院が犇めいていた時代がありました。この大幅な寺院数の減少には、火災も大きく関わっています。

古絵図の製作

既刊号の第一二五号では『高野山内図』（正保三年〈一六四七〉金剛峯寺蔵）、第一二一号・第一二九号では『高野山壇上寺家絵図』（宝永三年〈一七〇六〉金剛峯寺蔵）、第一一九号では『高野山壇上并寺中惣絵図』（寛政五年〈一七九三〉金剛峯寺蔵）、第一二三号では『高野山全山絵図』（寛政八年〈一七九五〉西室院蔵）を紹介しました。

なぜこのように一世紀ほどの短期間にいくつもの子院地域の絵図が製作されたかというと、高野山では度々火災に遭い、子院が移転や消滅したりしたので、その都度、山内の寺院配置状況を江戸幕府に報告したからです。その際、二部の絵図を製作して、一部は幕府に提出し、残りの一部は高野山の控えとして保存してきました。絵図の製作には様々な目的、用途がありますが、多くはこのような理由で、高野山には多くの絵図が残されているのです。

古絵図にみる火災跡

『高野山壇上并寺中絵図』（元禄六年〈一六九三〉金剛峯寺蔵　図1）などには、元々建物があったところ、例えば伽藍では「金堂假堂（仮堂）」、「灌頂院（堂）明地」（図2、写真1）、また山内各所に「明地（空地）」と記し、敷地が朱色に塗られた部分が見られます（図3～5）。これらは、幕府に山上の子院の存続状況を報告するために記されたもので、主にいくつかの谷の奥に多く分布していることから、度重なる火災の後、谷の奥の復旧は中々進んでいなかったことを物語っています。

昨年の令和元年には、高野山と同じ世界遺産であるフランスのノートルダム大聖堂、沖縄の首里城が相次いで焼失しました。このニュースは世界中の人々の心の拠り所である文化財が灰燼に付するという衝撃と喪失感をもたらしました。人類の宝である両世界遺産の早期復興を切に願って止みません。

（鳥羽正剛）

図2 『高野山壇上并寺中絵図』
伽藍金堂假堂・灌頂院（堂）明地部分

写真1 伽藍・灌頂院（堂）跡
かつて根本大塔と御影堂の間には灌頂院（堂）がありましたが、天保14年〈1843〉に焼失しました

図3 『高野山壇上并寺中絵図』南谷の明地部分　現在の高野山霊宝館南方

図4 『高野山壇上并寺中絵図』谷上・西院谷の明地部分
現在の大門～高野山高校付近

図5 『高野山壇上并寺中絵図』千手院谷の明地部分
現在の高野町役場付近